

## C 五郎沼と嶋の堂千手観音

### 嶋の堂千手観音

#### C⑩ 聖観音と千手観音

観世音菩薩は、「観音菩薩」と呼ばれるが、略して「観音様」とも呼ばれる。悩める世間の人々の音声おんじょうを觀じ、慈悲の心であらゆる衆生の悩みしゅじょうと苦しみを救い、願いを聞いて安樂を与える仏と説かれている。

観世音菩薩は、『妙法蓮華經』の「観世音菩薩普門品第二十五」（観音經）では、一心に観音の名を称えれば、即時にその音声おんじょうに応じて、火難、水難など衆生の七難を救うために、「仏身」「声聞身」「梵王身」など、三十三の姿に変身すると説かれ、三十三所靈場のもととなる。その千変万化の姿を現す考え方から、「観自在菩薩かんじざいぼさつ」とも称される。観音菩薩と名のつく仏には、基本となる聖観音のほか、十一面観音、千手観音、如意輪観音、馬頭観音など、変化観音へんげと呼ばれる異形いぎようの観音像を生み出した。観音思想の展開に伴って、十一面観音や千手観音などの変化観音が出現すると、それらと区別するため、基本形が聖観音しょう（正観音）と呼ばれるようになった。我が国ではこの聖観音像は非常に多く、昔から広く人々に親しまれている。

聖観音は、餓鬼道の世界にあった人を助ける観音で、六観音の一つに数えられる。この六観音は、真言系では聖観音、十一面観音、千手観音、馬頭観音、如意輪観音じゆんてい、准胝観音とし、天台系では准胝観音の代わりふくろうけんじやくに不空縹索観音とする。

六観音は六道輪廻の思想に基づき、六種の観音が六道に迷う衆生を救うという考えから生まれたもので、地獄道－千手観音聖観音、餓鬼道－聖観音、畜生道－馬頭観音、修羅道－十一面観音、人道－准胝観音、天道－如意輪観音という組み合わせである。

仏像は、基本的には如来・菩薩・明王・天・その他の5種類に分類される。菩薩像は出家前の釈迦をモデルとしているため、宝冠や首飾りなどを身に付けきらびやかな格好をしている。菩薩である聖観音像の基本的な姿は、阿弥陀仏の化仏付きの宝冠をかぶっているのが特徴で、天衣てんね、裙くんをまとい、瓔珞ようらく、鐶釧かんせんなどの美しい装具で身を飾り、左手に蓮華すいびようや水瓶を持ち、蓮華座の上に立像または坐像の姿で表現されることが多い。

千手観世音は、地獄に落ちた者を済度する観音で、六観音の一つに数えられ、千手千眼観世音菩薩などとも称する。千本の手は、多くの人々に救済の手を差し伸べる廣大無限の慈悲の心を表し、千個の眼は多くの人々を教え導く知を表すとされる。

千手観音は経典においては千本の手を有し、それぞれの手に一眼をもつとされている。実際に千本の手を持つ造像例もあるが、実際に千本の手を表現することは造形上困難であ

るために、造形的には42本の手で「千手」を表す像が多い。これは中央の2<sup>ひ</sup>臂を除く40本の手が1手につき25の衆生を救うと考え、40に25を乗じて1000となる考え方である。頭の上に十一面観音と同じく十一面の化仏をいただくことが多く、顔がいくつもあるのは、救う相手により一番効果的な接し方をすることを表している。それぞれの手には、救済の力を示すものとして、日・月・輪宝・宝珠・弓などを持つ。